

残暑も少しずつ和らぎ、ほほをなでる風が気持ちいい。今の季節こそ、屋外で体を思い切り動かしたい。注目なのが、まるで空中を散歩するかのよう、木か

ら木へと移動する「フォレストアドベンチャー」。森の澄んだ空気を思い切り吸い込んで、親子でリフレッシュしよう。
(長田真由美)

スリルいっぱい フォレストアドベンチャー



ワイヤにつかまりながら木と木の間を渡る子ども＝愛知県新城市のフォレストアドベンチャー・新城で

ブン。自然の中で遊べる醍醐味が受け、今では三十一カ所に広がった。一八八三年三月にスタートした新城の施設の面積は約〇・八畝で、サッカーのコート一面よりやや広い。スギやヒノキなどの木に設けられた足場は、高い所で地上十八メートル。階段やはしごで登った木と木の間に張られたワイヤにつかまりながら、丸太をつないだ長さ五メートルの橋などを渡る。滑車を使って全長百二十メートルを一気に滑り下りるジップスライドも。命綱につながった安全器具を着けてはいるが、バランス感覚が必要

だ。五つのコース全てを巡ると約二時間かかる。中学一年の兄(三)、父親(四)と来た同県長久手市の小学五年神谷千尋さん(一〇)は「公園の遊具で遊ぶのとは違う」とわくわくした表情。地上五メートルの位置に渡された揺れる板を伝いながら「この高さは経験ないな」とおっかなびっくりだ。

親子でわくわく、達成感

森を渡る風や鳥のさえずり、季節の移ろい。「自然を感じながら遊ぶ機会が減る中、多くの人がそこに魅力を感じているのでは」と、運営するエバイス(名古屋市中区)の杉浦正明社長(五十八)は言う。小中学生の校外学習や部活動のトレーニングにも使われていて、昨年は一万七千人が来園。当初見込みの九千人を大きく上回った。繁忙期は一日二百五十人が訪れるという。新城は小学四年以上、もしくは身長一四〇センチ以上、体重一三〇キログラム以下といった条件を設けているが、施設によっては小学低学年から利用できる所もある。

「うわー、めちゃくちゃ高い」「スリルがある」。あちこちから、そんな声が聞こえてくる。ここは、愛知県新城市の山あいにあるフォレストアドベンチャー・新城。九月初旬の休日、多くの親子連れや若者のグループが訪れていた。

一はフランス発の自然共生型アウトドア施設。一般的なレジャー施設と違い、森を切り開いて遊具を設置するといった大規模な開発をせず、立っている木をそのまま活用するのが特徴だ。

森が違えば、遊び方も変わる。針葉樹や広葉樹など地域ごとに植生も違つたため、その土地ならではの風土も体感できる。日本では二〇〇六年に富士山麓の標高千二百メートルの森に、第一号がオープンした。

森を渡る風や鳥のさえずり、季節の移ろい。「自然を感じながら遊ぶ機会が減る中、多くの人がそこに魅力を感じているのでは」と、運営するエバイス(名古屋市中区)の杉浦正明社長(五十八)は言う。小中学生の校外学習や部活動のトレーニングにも使われていて、昨年は一万七千人が来園。当初見込みの九千人を大きく上回った。繁忙期は一日二百五十人が訪れるという。新城は小学四年以上、もしくは身長一四〇センチ以上、体重一三〇キログラム以下といった条件を設けているが、施設によっては小学低学年から利用できる所もある。

日本の国土の三分の二は森林とされる。今、全国的に問題になっているのは、木の生育を促すための間伐をしなくなったことなどによる荒れた森林の多さ。値段的な輸入材が多く入ってきているため、多くが活用されずに眠っている。そうした中、フォレストアドベンチャーを造るには最低限の間伐が必要だ。森に光が入り、結果的に森林を管理することにも結びつく。杉浦社長は「木を傷つけないようにしているの、ワイヤを外せば森は元通り。開発でなく、共存がコンセプト」と言う。

この秋は森の空中散歩